

ロダン「考える人」を考える

家庭の談話「葦を考える」

7月の初めテレビを見ていた妻が、宣伝番組でロダンの「考える人」に目が止まって、私たちの会話が始まった

1、人間は考えるアシである。

「『人間は考えるアシである』」と言ったのはパスカルだったかな？」と質問してきた。
「そうだよ、ところで、「アシ」って漢字で書ける？」と聞くと
「書けますよ。」と言ってメモ用紙に書いてきた文字が「葦」であった。
「正解！、実はこの漢字が大学の入試の時に出て、自分も書けた。それも試験の数日前に覚えてばかりだった。ラッキーと思って回答した思い出深い漢字だよ。」
「ロダンとパスカルは何か関係があるのかな？」と問いが続く。
「そうだなあ。二人ともフランス人だから何か関係があるかもね。調べてみるよ」

便利なツールPCで調べると、パスカルは17世紀、ロダンは19世紀から20世紀の人で直接の関係はないがロダンはパスカルの影響を受けて「深く思考する人間の姿をリアルに彫刻した」ことが分かった。

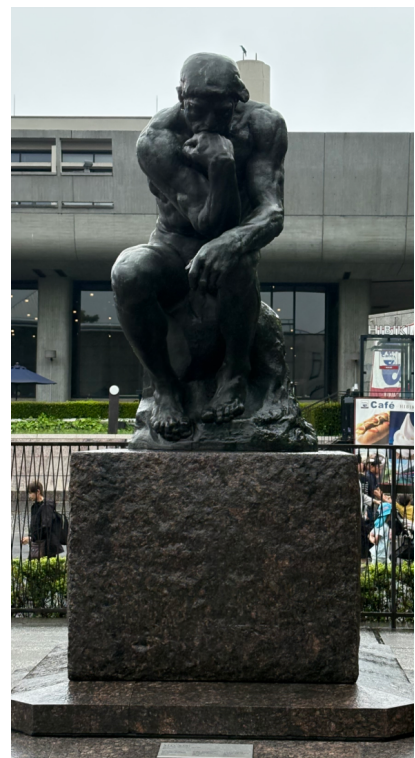
2、妻の独り言のような質問

「ロダンの考える人は何を考えているのかなあ。パスカルがいつている葦とはどういう意味なのかなあ」

「じゃあ、時代的に先にパスカルから調べて、考えてみよう。」

「人間は考える葦である」とは「人間が自然界では最も弱い存在である（葦のように）一方、思考する能力を持つ偉大な存在である」ことを意味している。

パスカルと同時代のデカルト（近代哲学の父・合理主義哲学の祖）は「我思う故に我あり」といって理性を重視している。この二人は17世紀を生きたフランス人、その歴史的背景の特徴は絶対王政下でのプロテスタントとカトリックの宗教戦争の激しい時代であった。
この二人に共通している興味深いことは「神の存在を証明しようとしたこと」である。



二人とも数学者で、物理学者でもある科学者である。デカルトは神の存在を証明していませんが、パスカルは面白い方法、即ち、「パスカルの賭け」で神の証明をして、彼は子供向けの「イエス伝」を書き残している。

3、再び妻の質問が始まった。

「葦って、そんなに弱いのかなあ？折れそうで折れない、しなやかさがあると思う」

「そのようだね、昔、メソポタミアでは泥に葦を練り込んで建築したという話を聞いたことがある。調べてみるよ。」

調べてみるとやはりあった。古代都市ウルクの時代（BC3200頃）の原風景が現代でも見られる。（写真）葦は多様な範囲で人間の生活を守ってくれたことが分かる。

「と、すれば、パスカルは何を言いたかったのだろうか。」

「色々と考えさせてくれるのが芸術や学問でしょう。自由に連想していいのじゃない。

そういえば、あなたもロダンよ。一日長い時間ロダンをしているでしょう。」これにはまいった。私のトイレの時間は長く不規則で悩んでいるロダンのよう。話がロダンに戻った。

4、国立西洋美術館の前庭にロダンの彫刻が四つある。

パスカルから2世紀後の19世紀後半から20世紀にかけて生涯作成した彫刻は6000とも7000ともいわれている近代彫刻の父と呼ばれているロダン。フランスにおいても工業化が進み合理主義は深く根付き、人間が作ったものによって人間が支配される時代の始まりであった。そんな苦悩を一身に背負った「考える人」は何を考えていたのだろう。

「上野で見たことがあると思うけど、ロダンの彫刻が左から「考える人」「カレーの市民」そして右の奥に「地獄の門」がある。あの広場は暗いイメージだと思わないか」

達観した妻は言う「置いた人に聞いて見ないと分からないでしょう。」



葦で作られた建物と、その周りで釣りやドクニックを満喫する芸者達。



「確かにその通りなのだが、地獄の門の上に考える人が彫ってあって、その人は地獄の有り様を眺めて考えているように思うのだが――」

ロダンが近未来を予見しているように思う。彼は「考える人」を苦しそうに彫り込んでいる。

パスカルの影響も受けているようだ。そして、彼の有名な言葉に『肝心な点は感動すること、愛すること、望むこと、身震いすること、生きること』がある。進化する合理主義の世界で忘れられていく感性、神への畏敬の念を訴えているのではないか。科学的合理主義の行き着くところをロダンは見ていた。「忍耐もまた行動の一形態である」と言って我々に警告しているのではないか。

「関税が美しい」という言葉には目が回る。ロダンの思いはますます深刻になる。カレーの市民の憂いを超えている。ロダンはどのように彫るだろう。



5、葦のような強さ

アシは又ヨシといわれている。「弱そうに見えて強い葦」「自然界の根っこを支えている葦を考える時、私に一つの聖句が浮かんだ。パウロが書いたコリント人への手紙二6章④節bから⑩節です。

大いなる忍耐をもって、苦難、欠乏、行き詰まり、鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓においても純真、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛、真理の言葉、神の力によってそうしています。

左右の手に義の武器を持ち、栄誉を受けるときも、辱めを受けるときも、悪評を浴びるときも、好評を博するときにもそうしていますのです。わたしたちは人を欺いているようで、誠実であり、人に知られていないようでいて、よく知られ、死にかかっているようで、このように生きており、罰せられているようで、殺されてはおらず、悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのように、多くの人を富ませ、無一物のように、すべてのものを所有しています。

真理を求める人々はこのような状況を神の助けによって生かされて来たのです。パスカルもロダンもこのように生きて作品を残してきたのでしょうか。

なにげない家庭の会話から突飛もないところに行きついてしまいました。おわり。

パリ通信・第163号

ジャコモ・セルポッタ

昨年夏シラクーサで「聖ルチアの埋葬」を見て、メッシーナで「羊飼いの礼拝」、ナポリは「七つの慈悲」、ローマ「聖マタイの召命」「聖マタイの殉教」、マルタ島「洗礼者ヨハネの斬首」と一年をかけてカラヴァッジョの足跡を追ってきた。特にシチリア島の自然と文化には深く感動し、カラヴァッジョが最後に訪れたパレルモに来た。

パレルモは人口68万(周辺部を入れると120万)、ローマ、ミラノ、ナポリ、トリノに次ぐイタリア第五の都市である。フェニキア人、ギリシャ人、ローマ人、アラブ人、ノルマン人と異なる勢力に支配され発展してきたパレルモだけに建築、料理、言語と文化の多様性に深く結び付いてきた。少し街を歩いただけで、ローマ様式、ノルマン様式、イスラム様式、ゴシック様式、ルネサンス様式、バロック様式、新古典様式が共存してきた特有の文化であることに気付く。

シチリア・バロックの代表的な建築「サン・ロレンツォ・オラトリオ(祈祷所)」にパレルモ唯一のカラヴァッジョ「聖ロレンツォと聖フランチェスコがいるキリストの生誕」(1609年)(298x197cm)(シチリア島最後の作品)がある(正しくは「ある」ではなく「あった」)。カラヴァッジョは1608年マルタ島の牢獄を脱出してシチリア島に逃れ1609年晩夏までシチリア島で制作していた。シチリア島滞在中に聖フランチェスコ修道会の注文で描いたのが「聖ロレンツォと聖フランチェスコがいるキリストの生誕」だ。

1951年ローマで修復が行われ、パレルモの「サン・ロレンツォ祈祷所」に戻って来たが、1969年10月17日夜盗難に遭った。2x3mの大きな作品である。祭壇上に額に入って高く掲げてあったのを額に沿って切り取り持って逃げたと言う嘘のような話だ。シチリアマフィアの計画的犯行とみられ、FBI始め世界中に捜査網が張られているそうであるが闇市場で売却されたのか、以後取り戻すことはできず、今後もう出てくることはないだろうと悲観的な見方である。

現在は1967年(盗難の2年前)撮影されたオリジナル作品の写真を元にコピーが飾られている(写真右)カラヴァッジョ盗難はとても残念なことだが、世界中の注目を浴びる結果となり、寂れていた「聖ロレンツォ祈祷所」を修復する機会となった。シチリア・バロック、特に1600年から1700年に頂点を迎えるパレルモ・バロック様式を復活させる機運に繋がったのである。



その「パレルモ・バロック様式」に欠かせないのがジャコモ・セルポッタ(1652-1732)だ。パレルモに生まれ、パレルモの多くの教会、祈祷所の内装をした「スタッコ彫刻家」である。彫刻家の家に生まれ、早くに父親を失うが、息子と共にパレルモを中心に活動している。ローマでベルニーニの彫刻を見ていたと思われるが、セルポッタは大理石ではなく「スタッコ」を選んだ。「スタッコ」とは石灰に大理石粉や砂、骨材、セメントなどを水に混ぜて柔らかい状態で形を作り、渾くと硬くなる建築材料だ。セルポッタは彫刻を始め、浮き彫り、だまし絵、壁枠など幅広い装飾に利用し、大理石の高貴さに負けない「セルポッタの白」を生み出したのである。

1600年からパレルモでは「オラトリオ建設」が盛んに行われた。長方形で正面に祭壇を置いた単純な建築であるが、「聖ロレンツォ祈祷所」「聖ロザリオ祈祷所」「聖ドメニコ祈祷所」「聖メルクリオ祈祷所」「ヴィアンキ祈祷所」など、至る所に建立され、セルポッタがその内部装飾を引き受けたのだった。宗教上の制約は尊重しつつもセルポッタの自由で人間味に溢れる感性と細部の完成度は唯一無二で、「プットー」と呼ばれる羽根の生えた小さな天使(裸の男の子)の表情は愛らしく、4面の壁一杯を飾った彫刻、レ



リーフ彫刻は白く明るく輝き、「美徳、自由、勝利、謙遜」と言ったアレゴリー人物たちは官能的で、セルポッタの深い観察力、感受性、人間性、それを表現するスタッコ技術の素晴らしさにその場を離れ難い感動に包まれた。パレルモのカ



ラヴァッジョを見ることはもうできないだろうが、それを補って余りあるパレルモの素晴らしさで、次回いつシチリア島に来れるか分からないが達成感ある滞在だった。

(古賀順子記)